



式典でAIについて講演する酒井教授

学校図書館法公布
70周年記念式典の
動画はこちらから



研究者が生成AIに警鐘

民主主義の大切さを次世代に 東京新聞のNIE

質問文を入力すれば自然な日本語で答えが返ってくる。日本語で答えるべきではない。GPTとのこうした応答をめぐり「多くの人は対話だと勘違いして『リアルな対話』であるかのように使っているが、これは対話ではないんですね」と、脳科学研究员の酒井邦嘉・東京大大学院教授は、きっぱり指摘する。

8月上旬、都内で学校図書館法公布70周年式典（「文字・活字文化推進機構」などの主催）が開かれた。その記念講演で酒井教授は、「（対話型ではなく）『対話風』と報道すべきです」と強調した。

チャットGPTは、入力された言葉に続く可能性の高い言葉を、背後の大規模言語モデルの情報を基に提示する。「適当にどんどん出しているだけ。それをもって生成とか創造とか（いうのは、おこがましい」と酒井教授。

予測してみせた。

講演の締めくくりに酒井教授は、21世紀が幕を開けた2001年元日の産経新聞紙面で取材に答えた思い出を明かした。記事には酒井助教授（当時の予測が、こう掲載されている。「鉄腕アトムのように人の心を持つかのようないふるまうロボットの出現は遠い未来のことではない」「『意識』を持つように見えるロボットが完成したため、ロボットと人間がどう共存していくかで悩む時代も夢語ではない」（東松充憲）



対話ではなく「対話風」

「相手の心や意図を、推理・想定しない。そもそも今のAI技術でそれはできない。大衆向けに売れるようにするデザインはただひとつ、イエスマンをつくるだけ。何を言わしても『その通りですね』と返す。（使う側も）そのほうがうれしいからどんどん質問してペットのように扱う」心地よい言い回しで答え続ける生成AIと、正しこそではない膨大な情報ばかりではある。いかにも「あふれるインターネット」。それらに依存しがちとなるこの怖さについても、酒井教授は次のように指摘した。

「自分に都合のよい情報を収集するので当然、情報のバイアスが生じてそれに気づかないことが多い。自己肯定感が増す面もあるが、やりすぎると、人の意見をまったく聞くかなくなる。分かってくれるのはチャットGPTだけだ、自分は常に正しい、周りが自分のことを悪く言っている、と増幅するのが一番怖い」ネット上には今後、だれが書いたか分からぬような情報に加え、「だれが問い合わせて生成されたか分からぬ文章が増えてネット空間を支配していく」と酒井教授は予測してみせた。

「相手の心や意図を、推理・想定しない。そもそも今のAI技術でそれはできない。大衆向けに売れるようにするデザインはただひとつ、イエスマンをつくるだけ。何を言わしても『その通りですね』をこう說いた。